vol.284
Autumn 2026

お茶の水女子大学の今を伝える広報誌

Ochadai GAZETTE
お茶大ガゼット



Contents

02 お茶の水女子大学のSDGsへの取組

06 学生のアクティビティ
第77回徽音祭

08 教員紹介
水野 輝之
基幹研究院 人文科学系 助教

09 卒業生紹介
日向 春華 さん
生活科学部 人間生活学科 発達臨床心理学講座 卒業
人間発達科学専攻 発達臨床心理学コース 修了

10 附属学校園からのお知らせ
附属高等学校



お茶の水女子大学のSDGsへの取組

「誰一人取り残さない」社会の実現を目指すSDGs。その達成に向けては、一人ひとりの行動のみならず、知を創出し社会へ還元する大学の役割も重要です。本特集では、SDGsの実践活動を統合する拠点として設置された「SDGs推進研究所」の取組を中心に、学内の研究所やセンター等が展開するSDGsを推進する活動の一端をご紹介します。

誌面のタイル模様は、現代美術家の日比野克彦氏（東京藝術大学長）と本学附属小学校・中学校の児童・生徒によるワークショップで制作された陶板「3つの色とわたしの夢」です。（国際交流留学生プラザ1階に設置）

SDGsとは?

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）は、2015年に国連で採択された国際目標です。誰一人取り残さない社会の実現を目指し、2030年までに取り組むべき17の目標と169のターゲットから構成されています。貧困や教育、ジェンダー平等、環境保全など、世界が直面するさまざまな課題の解決に向けて、国や企業だけでなく、一人ひとりの行動が求められています。

大学は、研究・教育・社会貢献を通じて社会課題の解決に貢献する役割を担っています。特に、女子教育の先頭に立って歩んできたお茶の水女子大学では、ジェンダー平等や教育機会の拡充をはじめ、地域・国際社会などとの協働、環境保全に関する取組など、多様な活動を通じてSDGsの実現を目指しています。

SDGs推進研究所について

お茶の水女子大学SDGs推進研究所は、「生活者起点のSDGs」をテーマに、研究・教育を集約し、附属学校園（幼稚園・小学校・中学校・高等学校等）をはじめ企業・他大学・地域と連携しながら特色あるSDGs活動を推進しています。生活者一人ひとりの行動がコミュニティを動かし、社会全体のムーブメントとなる本学のSDGs推進活動を“OCHA-SDGs”と名付け、学内外の結節点として、すべての人々がSDGsに貢献できる仕組みづくりの創造を目指しています。

研究所では、多様な分野の研究と実践を結び付け、社会課題の解決に向けた活動を推進しています。また、研究成果や実践事例を広く発信し、多様な立場の人々がともに考え、対話する機会づくりとしてのシンポジウムや講演会の開催にも力を入れています。さらに、学内の研究・教育活動と社会を結び付ける役割を担い、企業や自治体、他大学との協働を通じて新たな価値創出や社会実装を推進しています。

OCHA SDGs
Ochanomizu Univ.
Institute for SDGs Promotion



2025年度には、創立150周年記念公開シンポジウム「災害レジリエントな社会の実現に向けて－避難生活の質の向上を目指す－」を開催し、本学の学生・教職員及び各附属学校の生徒・教職員をはじめ、企業や地域の方々にも多数ご参加いただきました。

また、年間を通じて実施する多くの事業には、SDGsに関心を持つ学生有志によるOCHA-SDGs学生委員会が関わっています。本学ではSDGsを「学ぶ」だけでなく「実践する」ことを重視しており、学生自身が学部や学年を超えて企画・運営を担いながら、地域や企業と連携し、生活者の視点から社会課題の解決に挑戦しています。学生同士が学部や学年を超えてつながり、アイデアを形にできることも大きな特色です。

SDGs推進研究所の主な取組をご紹介します!

大学フードドライブ

2022年度より、家庭で食べる機会を失った食品を回収しフードバンクに寄付するフードドライブを実施しています。この取組は、2022年に本学とSDGsに関する包括連携協定を締結した株式会社セブン＆アイ・ホールディングス（以下、セブン＆アイ）との共同事業です。セブン＆アイからはフードドライブの立ち上げに際し、その意義や理念、運用上の注意点等について助言を受けるとともに、食品の寄付先の紹介を受けました。また、現在も回収Boxの貸与を受けています。

本学ならではのフードドライブの特徴として、大学と附属学校園が参画し、オールお茶の水で展開していることが挙げられます。大学と附属学校園の全てが同一キャンパス内に位置するという立地を生かし、相互が緊密に連携することで、食品ロス削減と寄付文化の醸成に取り組んでいます。

例えば、2024年からは、附属小学校とOCHA-SDGs学生委員会が家庭科の授業で交流し、「おすそ分け」の理念に基づく事前学習を実施しています。これまでに、全学で合計700kgほどの食品が集まり、それらはフードバンクに寄付されました。



事業系食品ロス削減プロジェクト

東京都北区と連携し、2025年度より食品ロス削減への意識向上や食べ残し削減を促進する取組を進めてきました。その一環として、OCHA-SDGs学生委員会が「北区版食品ロス削減協力事業者制度」の仕組みづくりにも取り組んでいます。半年以上に及ぶ活動を通して作成した制度案は、北区内での検討を経て採用され、「東京都北区もったいないゼロ応援店」として2026年7月よりスタートしました。



資源循環プロジェクト「リ茶イクル」

本学とサントリーホールディングス株式会社が2025年度に協定を締結し、産学連携の一環として合同企画を実施しています。この企画から学生有志によるペットボトル水平リサイクル活動「リ茶イクル」が誕生しました。使用済みペットボトルをペットボトルへと再生する「BtoB水平リサイクル」の資源循環の仕組みを学び、分別を促す活動や情報発信を学生自ら企画・実践しています。「誰かが解決する課題」ではなく、「自分たちの行動で変えられる課題」として捉え、学生のアイデアと行動力で学内に変化を生み出し、身近な一歩から持続可能な社会づくりに挑戦する取組は、その輪を広げています。





担当：井上　登喜子　広報・学術情報担当副学長、広報推進室長　基幹研究院人文科学系　教授

OCHA-SDGs学生委員会による取組について



OCHA-SDGs学生委員会は、学生が主体となり「生活者起点のSDGs」をテーマに身近な社会課題を自分ごととして捉え、解決に向けた活動に取り組んでいます。

約50名の委員が所属し、附属学校園や企業、自治体との連携を生かした約10のプロジェクトが活動しています。また、朝日新聞「SDGs ACTION! Campus」や東京都文京区主催のクールアースフェアなどに参加し、学外への発信も積極的に行っています。



ここでは、いくつかのプロジェクトの活動を紹介します。「おゆずりフェスプロジェクト」では、自分では使わなくなったものを学内で譲り渡すシェアリングサービス活動「おゆずりフェス」を定期的に実施しています。



お茶大生から回収した服や文房具、日用品を学内で無料配布することで、廃棄物の削減や資源の有効活用を図る場を提供しています。2025年12月開催時には、服やバッグ、日用品、文房具、雑貨など合計405点の不用品を学内で回収し、277点を譲渡することができました。

「手話べりプロジェクト」は、手話によるコミュニケーションの機会の創出を目的として2024年6月に開始されました。手話べりとは「手話」と「おしゃべり」の2語を組み合わせた造語です。活動の中心である「手話べり会」は、参加者が気軽に手話で交流できる場です。本学の学生・教職員が参加できる交流の場として、昼休みにおおむね週1回開催しており、2025年度には計39回実施しました。継続的な活動を通じて、手話を身近に学びながら多様な人々とのコミュニケーションについて考える機会となっています。



「マイボトルを持とうプロジェクト」は、学内のペットボトル使用量を削減して環境負荷を軽減することを目的として、本学の消費生活協同組合（以下、生協）と連携し、生協食堂へのウォーターサーバー設置に向けた提案や運営面でのサポートを行い、お茶大生や教職員のマイボトルの利用を促す活動をしています。2024年11月のウォーターサーバー設置後は、利用券のデザイン作成や広報活動、利用環境の改善に取り組んでいます。設置から2026年5月までの総給水量は18,895Lに達し、500mlペットボトル約38,000本分に相当します。利用者の増加を受けて、2026年7月には2台目のウォーターサーバーが設置されました。





OCHA-SDGs学生委員会では、これからも身近な行動を持続可能な未来へつなげる活動に取り組んでいきます。



学生委員会作成トレーディングカード

OCHA-SDGs学生委員会委員長から一言

OCHA-SDGs学生委員会の魅力は、SDGsにつながると思ったアイデアを形にできるワクワク感です。例えば、私が2年生のときには、小型電子機器を回収する「都市鉱山企画」を提案しました。当時は金属の資源循環に関するプロジェクトがありませんでしたが、研究所の協力もあり、既存のシェアリングサービスのプロジェクトに組み込む形で実現しました。また、委員会ではSDGsという幅広いテーマのもと多様な活動を行っているため、委員一人ひとりの意見や発想を生かせる機会が多くあります。自分の価値観や考えを深めながら、それをプロジェクトに反映できる場所となっています。ワクワクしながら新しい挑戦ができることが大きな魅力です。

OCHA-SDGs学生委員会委員長　久保　心雪さん
文教育学部 言語文化学科 グローバル文化学環コース3年

お茶大によるSDGsへの取組をもっとご紹介します

SDGsの実現に向けた取組は、学内のさまざまな研究所やセンター、学科でも行われています。
教育、国際協力、地域連携、環境保全など、それぞれの専門性を活かした実践をご紹介します。

STUDY FOR TWO

STUDY FOR TWO は、「勉強したいと願うすべての子どもたちが勉強できる世界に」を活動理念に掲げ活動する、日本の大学生によるボランティア団体です。お茶の水女子大学支部は、2012年から14年にわたって活動を行ってきました。現在は、教科書を通じて教育支援ボランティアを行っています。私たちの活動では、学生から使い終わった教科書の寄付を募り、その教科書を必要とする学生に安価に再販売します。そしてその販売で得られた利益を、開発途上国の子どもたちの教育支援（識字教育・女子教育）に充てています。これからもお茶大生そして開発途上国の子どもたちに支援を届けられるよう、励んでいきます。



STUDY FOR TWO
お茶の水女子大学支部長
日髙　花香さん
文教育学部　言語文化学科
グローバル文化学環 2年

幅広い学校が対象の臨海実習と全国への海産生物材料の提供

千葉県館山市にある湾岸生物教育研究所では、本学の授業だけでなく、首都圏の大学や高校、小中学校などの“臨海実習”を受け入れて海の学習の機会を幅広く提供しています。海藻が減少しサンゴが増えるなど大きく変化している海の環境を、生き物を自分の手で採集する経験を通して学びます。また、海から離れた教室でも海の生き物の実験を行えるよう、全国の高校や大学へウニの卵などの生物材料を提供しています。さらに、生物材料と顕微鏡を自宅へ届け、オンラインの指導を行う“リアルな”リモート実習も全国の高校生向けに実施しています。



湾岸生物
教育研究所長
清本　正人
基幹研究院
自然科学系 教授

乳幼児ケアと就学前教育研修

開発途上国では、一般的に乳幼児ケアや就学前教育の重要性に関する理解が十分でなく、専門人材も不足しています。こうした状況を踏まえ、グローバル協力センターでは、就学前教育制度の整備・普及を担う行政官や視学官、指導主事など指導的な立場にある人材の育成と能力向上を行うことを目的とした研修を実施しています。

この研修は、JICAの委託を受け、アフリカ・中東・アジアの国々の行政官や教員等を対象に実施しています。2025年には、カンボジア、エジプト、キルギス、ラオス、リベリア、モンゴル、シエラレオネ、ベトナムから8名が参加しました。



グローバル
協力センター長
由良　敬
基幹研究院
自然科学系 教授

池袋エリアプラットフォーム

共創工学部藤山研究室は、産官学民が連携して池袋のまちづくりを進める「池袋エリアプラットフォーム」に参画しています。2025年度には社会実験「IKEBUKURO25」を実施しました。学生が、地域の方々や企業、行政等と協働し、ストリートファニチャー等を活用した街路空間のデザインや、人々の滞留・回遊行動の調査・検証を行いました。大学での教育・研究を実際の都市空間へ展開し、多様な人々が快適に歩き、滞在し、交流できる持続可能なまちづくりを実践しています。



共創工学部 人間環境工学科　藤山　真美子研究室

担当：五十嵐 悠紀　基幹研究院自然科学系　准教授

Student Activity
学生のアクティビティ








第77回 徽音祭

11月7日(土)・8日(日)に開催される
学園祭「徽音祭」について、徽音祭実行委員の
5人にインタビューをしてきました！



テーマ「彩(いろどり)」とロゴについて教えてください！



「彩」には、一人ひとりの個性や想いをそれぞれ異なる“色”として捉え、それらが重なり合い、関わり合うことで、新たなつながりや価値が生まれていく、そんな徽音祭になるようにとの思いを込めています。運営側の学生、企画参加者、ご来場くださる方など、多くの人々がそれぞれの色を輝かせながら一つの徽音祭を創り上げていく、そのような思いをこのテーマに託しました。

また、「77」という数字から連想される“7色”や“虹”のように、多彩な個性が集まり、互いを彩り合いながら新たな景色を生み出していけるような学園祭を目指しています。

徽音祭が、人と人、想いと想いをつなぐような存在となり、多くの方に彩り豊かな時間を届けられたら嬉しいです。

開催にあたっての意気込みや、これまでの活動について教えてください！

お茶の水女子大学創立150周年という大きな節目を経て迎える今年の徽音祭では、これまで受け継がれてきた伝統を大切にしながらも、新たな取組に挑戦し、さらなる発展を目指しています。その実現に向けて、実行委員会の運営体制から徽音祭に関わるさまざまな事柄まで幅広く見直しを行いました。

また、委員全体で徽音祭の強みや課題を共有するとともに、他大学の学園祭や実行委員会との積極的な交流を通じて新たな知見を取り入れながら、意見交換を重ねています。そこで得られた新鮮なアイデアを取り入れながら、先輩・後輩を問わず自由に意見を出し合える環境づくりに努め、広い視野を持って活動しています。

伝統を受け継ぎつつも変化を恐れず、新しいことに積極的に挑戦する姿勢を大切にしながら、ときには立ち止まって自らの取組を見直し、より魅力的な徽音祭の実現に向けて邁進しています。





きいちゃん Profile

◆生息地
お茶の水女子大学。図書館や学食の近くにいることが多い。

◆年齢
実は人間でいう大学生くらい。妖精さんだから歳をとるのが遅い。

◆体長
15cmくらい。でもみんなに会いたい時は妖精さんの力で大きくなれちゃうの～♪

◆好きなこと
おいしいものを食べること。お茶猫(お茶大に住む猫)と遊ぶこと。

◆特徴
頭についているフヨフヨはお茶とお水がモチーフで、美味しいものや楽しそうなものを見ると反応する。きいちゃんを上から見ると服がお茶大の徽章の形になっている。

◆口癖　「なの～♪」

今年度、力を入れていることや工夫したことは何ですか？

今年度は、案内板やパンフレット、公式ホームページ、テントでの案内などを通じた「情報伝達の明瞭化」に重点を置いて取り組んでいます。これは、他大学の学園祭を訪れた際に、徽音祭のさらなる発展に向けた課題の一つとして挙げられた点でした。

その背景には委員間の連携不足があると考えられたため、今年度は各担当と課題意識を共有するとともに、委員同士の交流を深める取組にも力を入れています。その一環として、新入生歓迎イベントなどの新たな企画を実施し、円滑なコミュニケーションが生まれる環境づくりを進めてきました。

私たちは、実行委員自身が活動を楽しみ、団結して徽音祭づくりに取り組むことで、その熱意や魅力、一体感が学園祭全体にも反映され、来場者の皆さまにもより充実した時間を過ごしていただけると考えています。そのため、情報発信の改善だけでなく、委員会全体のつながりを強化することにも注力しています。

また、地域に還元できる学園祭を目指し、「地域連携」にも力を入れています。その一環として、地域で開催されるさまざまなイベントに積極的に参加してまいりました。徽音祭を開催できるのは、地域の皆さまのご理解とご協力があってこそです。イベントを通じて地域の方々の楽しそうな姿に触れる中で、私たちが創り上げる徽音祭もまた、地域にさらなる“彩”を与えたいとの思いがますます大きくなりました。その思いを胸に、地域の皆さまにも愛される徽音祭を目指して活動しています。





おすすめ企画や見所はありますか？

徽音祭実行委員会では、第77回徽音祭が、これまで受け継がれてきた魅力や伝統を大切にしながらも、新たな挑戦を取り入れた、より魅力的で新鮮な学園祭となるよう、全員で試行錯誤を重ねながら準備を進めてまいりました。

また、実行委員だけでなく、参加団体の構成員も、この二日間のために力を尽くし、ご来場いただく皆さまに楽しんでいただけるよう日々活動してまいりました。

当日は、私たちが数か月にわたって積み重ねてきた努力の成果を形にし、来場者の皆さまに“彩”を与えられるような、特別な時間をお届けできるよう尽力いたします。

第77回徽音祭が、皆さまにとって心に残るひとときとなれば幸いです。皆さまのご来場を、実行委員一同心よりお待ちしております。

HP　Instagram　X

教員紹介 Interview

基幹研究院　人文科学系　助教　水野 輝之 先生



Profile

岐阜県出身。京都大学文学部卒業後、同大学大学院文学研究科を経て、米国コネチカット大学言語学科博士課程に進学。2023年に同大学にてPh.D.(言語学)を取得。同年4月に本学に着任。

Q1 ご専門の研究についてお聞かせください。

言語学の一分野である形式意味論を専門としています。人間の言語を「形と意味を結びつけるシステム」と想定した上で、その背後に隠れるメカニズムを、論理や数学の道具立てを用いて研究しています。ことばの意味は言語学において比較的新しい研究領域であり、歴史的には哲学の分野で長く議論されてきた問題です。1960年代以降、言語学者、哲学者、数学者の学際的な交流を通して、現代の形式意味論の枠組みが生まれました。

私自身は博士課程以来、反事実表現に関わる問題に取り組んでいます。英語の*If I were older, I could drive*とか、*I wish you were here*といった表現です。比喩的な話ですが、私たちが現実とは異なる状況に思いを巡らす時、その仮想の状況を表す文脈が、一時的なメモリとして談話に導入されます。このとき、例えば仮定法過去のような言語形式は、仮想的な文脈を参照するためのシグナルとして機能していると考えられます。文や談話の構造の内部で、仮想的な文脈がどのように伝搬し、更新されていくのか。そしてその仕組みを、我々は言語を介してどのように符号化しているのか。反実仮想は人間の知的活動の根幹をなす思考であり、ゆえにこれらの問題は、究極的には言語学を超えた広い射程を持つものと考えています。

Q2 研究者を志したきっかけをお聞かせください。

最初から研究者を志していたわけではなく、学部3年生の頃には企業で働くことを目指して就職活動をしていました。一方で、大学で学ぶ学問に、遅まきながら少しずつ興味を持ち始めた時期でもあり、最終的には早々に就活に見切りをつけて進学を決めました。修士課程1年次に半年間シンガポールに留学する機会があり、そこでお世話になった先生方に、米国の博士課程への進学を勧められました。研究者というキャリアが、初めて自分の中で現実的なものになった瞬間でした。その後実際に留学し、博士号を取得して今に至りますが、学部生の頃の自分に、あなたは将来お茶大で言語学を教えることになると伝えても、にわかには信じてもらえないかもしれません。しかしながら振り返ると、興味のあることに熱中したり、物事をじっくりマイペースに考えたりという自身の性分が、学術研究という営みと相性が良かったと感じることは少なからずあります。研究者になったのは偶然の産物ですが、個人的には天職だと思っています。

Q3 お茶大生へメッセージをお願いします。

人生は意思決定の連続であり、特に大学の数年間は、将来に関する重要な決断を多くしなければならない時期です。意思決定という行為は、論理的には、未来に伸びる論理空間を切り分けて複数の選択肢を作り、それらを選好に基づいて順位づけし、その中で最も望ましいとされる未来に自らの身を置く行為とみなすことができます。より良い意思決定をするには、選択肢を適切に定義し、選好の基準を明確にする必要があります。そのためには、物事のあり方に関する知識を深めて視野を広げるとともに、多様な考えや価値観に触れる中で、自分自身が本当に大事にしたいものを見極める必要があります。大学は、まさにそのような場を提供するために存在しています。限られた時間の中で何かを決断することは容易ではありませんが、普段の授業や仲間との交流を大切に、皆さんが悔いのない未来を選んでいくことを願っています。

担当：辻谷　真知子
基幹研究院人間科学系　准教授

Q1 現在のお仕事に就くまでの経緯と、現在のお仕事内容について教えてください。

幼い頃から人の話を聞くことが好きで、友人から「カウンセラーに向いていそう」と言われたことをきっかけに心理の仕事に興味を持ちました。心理の仕事をするには臨床心理士資格があると良いと思い、その養成校であるお茶大に入学しました。学部生の頃は漠然と学校現場で働くつもりでしたが、大学院時代に中学校での実習やスクールカウンセラー補助のアルバイトを経験するうちに、より子どもに近い臨床現場で働きたいと思うようになりました。調べる中で児童養護施設での仕事に興味を持ち、現在の職場へ見学に行き仕事について話を聞いてみたところ、「こういう仕事がやりたい」とピンときたので就職を決めました。

仕事内容は、入所している子どもに対するカウンセリングや心理教育、職員へのコンサルテーション、児童相談所や学校等外部機関との連携などです。施設では毎日色々なことが起こり、楽しいことばかりではなく、頭を抱えたくなるような大変なこともあります。しかし、日々成長していく子どもの姿を間近で見られることは、その大変さを掻き消すほどの大きな喜びを感じさせてくれます。その喜びを糧に、施設における最終目標である子どもの最善の利益の実現に向け、子どもの話を聞いて気持ちに向き合って寄り添いながら、その子に対して今は何をする必要があるのか・この先は何をしていく必要があるのかを日々考えながら働いています。

Q2 お茶大での学びや学生時代の経験は、現在どのように活かされていますか。

心理士として働くには、臨床心理学の一定の知識があることだけでなく、入所している子どもや一緒に働く職員、外部機関の人など、関わる全ての人をリスペクトする姿勢がとても大切だと思っています。そう思えるようになったのは、お茶大での講義や実習やスーパービジョン※の中で、「心理士として働くとはどういうことか」について自分自身でじっくり向き合って考えたことを言葉にして発信し、更にその発信に対して先生方からフィードバックをもらうという機会を与えてもらったからに他なりません。お茶大では、学生一人ひとりがどのような体験をしてどう感じて何を考えたかについて内省を深める過程で、気づきや学びを得られるように丁寧に導いてくれます。だからこそ、働く上で大切な心構えについて学生のうちに深く考えることができました。また、そういった内省を促される指導を受ける中で、自分の長所や課題にも気づかされました。そのおかげで、現在の仕事でも、自信を持って長所を活かした働きをしたり、反対に「自分はこういうところで躓(つまづ)きやすいから気をつけよう」と自分を律する意識を持ったりすることができていると思います。

※心理学分野において、経験豊富な指導者から助言や指導を受けながら、専門性の向上を図ること。

Q3 お茶大で学ぶ学生へのメッセージをお願いします。

少しでも自分のアンテナに引っ掛かることがあれば積極的に触れてみてほしいです。自分の専攻の授業はもちろんのこと、それ以外でも面白そうだと思った授業を受けてみるのも良いと思いますし、気になるサークルに複数所属するのも良いと思います。インターンシップに参加したり、学生料金で楽しめる美術展や演劇を観に行ったりするのも、今だからできることです。学生時代は想像よりもあっと言う間に過ぎていきますので、「ちょっと興味があるな」という気持ちを逃さずに動いてみてほしいと思います。そのことが、現在だけでなく将来の自分にも豊かなものを与えてくれるはずです。

担当：マルセロ デ アウカンタラ
基幹研究院人間科学系　准教授



卒業生紹介 Interview

社会福祉法人興望館 児童養護施設沓掛学荘　日向 春華 さん

Profile

2020年3月生活科学部人間生活学科卒業。2022年3月人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻発達臨床心理学コース修了。同年4月、社会福祉法人興望館に入職。現在に至るまで、同法人が運営する児童養護施設沓掛学荘にて心理療法担当職員として勤務している。

附属学校園からのお知らせ

Senior High School ~~~ 附属高等学校便り ~~~ from Ochanomizu University

スーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業　活動紹介

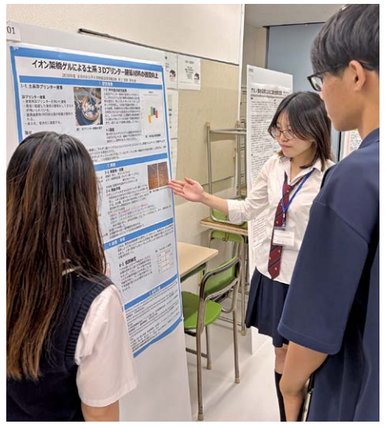
附属高校は、文部科学省SSH(スーパーサイエンスハイスクール)の指定を受け、今年度でⅡ期３年目になります。
今回は、そのプログラムの中で、夏休みに行われたいくつかの取組を紹介します。
他にもさまざまな活動の報告を本校Webサイトに掲載しています。詳細は右下のQRコードからご覧ください。

















今夏、本校生徒は、国内外の研究者や高校生と交流する多彩な理数系プログラムに参加し、研究や進路への関心を深めました。

7月24日(金)から27日(月)には、1年生2名がOECD原子力機関主催の「国際メンタリングワークショップJoshikai in Tokyo 2026」に参加しました。日本、ルーマニア、米国の女子高校生が、理工系分野で活躍する女性研究者をメンターとして、英語による討議や講義、ポスターセッション、グループ発表に取り組み、最終日には東京科学大学の研究室を訪問しました。生徒は、異なる背景をもつ仲間や研究者との対話を通じて視野を広げ、挑戦することの大切さを実感しました。

7月27日(月)から29日(水)には、2年生10名が関東近県のSSH指定女子高校等6校の生徒と京都大学での研修に参加しました。「生物」「生命科学」「化学」「物理・数学」「宇宙・地球惑星科学」の5コースに分かれ、特別講義、実験、花山天文台の見学、大学生との交流などを体験しました。本校卒業生が講師を務めたほか、同大学に進学した卒業生とも交流し、課題研究や進路を考える貴重な機会となりました。

8月5日(水)、6日(木)には、3年生3名が神戸で行われた全国239校の代表が集うSSH生徒研究発表会で、「バイオエタノール生産の効率化を目的とした固定化酵母ゲルの改良」について発表しました。他校の生徒や教員から助言を受け、研究への意欲を一層高めました。

8月20日(木)には、1・2年生計10名がお茶の水女子大学主催のSSH指定女子高校等研究交流会に参加しました。「工学」「数学」「物理」「化学」「生物」「情報」の各コースで、蛍光顕微鏡による観察やPythonを用いた気象・気候データ解析など、大学ならではの専門的な学びを体験し、他校生徒との課題研究交流も行いました。

8月27日(木)、28日(金)には、最先端科学フィールドワークを実施しました。3年生の理系選択者のうち希望者19名が、京都大学iPS細胞研究所と東京大学宇宙線研究所スーパーカミオカンデを訪れました。

さらに8月29日(土)には、「課題研究Ⅲ」を履修する3年生2名がInternational Student Symposium 2026で「イオン架橋ゲルによる土系3Dプリンター建築材料の強度向上」を発表し、ゴールド賞を受賞しました。大学生・大学院生から専門的な助言を得たことは、研究を発展させ、将来像を描く大きな励みとなりました。今夏の経験を、今後の課題研究や進路選択に生かしていくことが期待されます。

本校Webサイトはこちら ▶

附属学校園での出来事　2026年 7月～9月

Jul. 7

附属高等学校
- 第Ⅰ期教育実習
- 1・2年学力テスト
- 2年課題研究構想発表会
- 保護者会(1～3年)
- お茶大サマープログラム(～8月)
- 終業式
- 3年三者面談(～8月)

附属中学校
- 第1回学力テスト(3年)
- 学年別保護者会
- 終業式
- オープンスクール(お茶中生がガイドする校舎見学ツアー)
- 帰国生編入検定、発表
- お茶大サマープログラム

附属小学校
- 保護者会(1～5年)
- 個人面談
- 林間学校(裏磐梯)(6年)
- 終業式

附属幼稚園
- 幼稚園主催講演会
- 5歳児バス遠足(葛西臨海水族園)
- 七夕
- 個人面談(5歳児)
- 誕生会(7月・8月合同)
- 終業式

いずみナーサリー
- 七夕
- 水遊び
- 避難訓練(地震・水遊び中)
- 夏野菜カレーパーティー

こども園
- 水遊び・プール遊び
- 7月誕生会・七夕
- 避難訓練・安全指導
- 全園児歯科健康診断
- 乳児園医健康診断
- 終業式
- 8月誕生会
- 1号：夏季休業開始
- 1号登録、2号、3号：夏の保育開始
- 夏まつり

Aug. 8

附属高等学校
- お茶大夏の研修会(関東近県SSH指定女子高校等研究交流会)
- 最先端フィールドワーク
- 理数一日体験授業

附属中学校
- 工場見学会・シンポジウム・情報工学セミナー(理系女性育成啓発研究所主催)
- 2学期始業式
- 第2回学力テスト(3年)

附属小学校
- 帰国児童入学検定
- 林間学校(八子ヶ峰)(5年)

いずみナーサリー
- 水遊び
- 避難訓練(火災・不審者)
- ゆうがたゆらゆらフラダンス

こども園
- 水遊び・プール遊び
- 乳児園医健康診断
- 避難訓練・安全指導
- 1号：夏季休業終了
- 1号登録、2号、3号：夏の保育終了

Sep. 9

附属高等学校
- 始業式
- 第Ⅱ期教育実習
- 第2回学校説明会(Web配信)(～3月)
- 文化祭(輝鏡祭)
- 2年生路講演会

附属中学校
- 第Ⅱ期教育実習
- 生徒祭
- 中間テスト(3年5科、1・2年英語)

附属小学校
- 始業式
- 不審者対応訓練
- 栄養教育実習
- 水泳学習終了
- 保護者会(5・6年)
- 校外学習(1・3・5年)

附属幼稚園
- 始業式
- クラス懇談会
- 教育実習(後期2週間)
- 誕生会(9月)
- 避難訓練
- PTA主催講演会

いずみナーサリー
- 水遊び終了
- お月見
- 避難訓練(首都圏大地震・引き渡しおよび安否確認訓練)

こども園
- 始業式
- 水遊び
- コンサート(お茶の水管弦楽団)
- 保護者説明会(登降園ルート変更について)
- 避難訓練・安全指導
- 乳児園医健康診断
- 第2回ワクワクデー
- 9月誕生会・お月見
- 5歳児遠足(大学内)
- 水遊びおわり







裏表紙について：

「日本服飾史基礎演習」のゼミの一環で、構内で綿花を栽培しています。学生は綿花の栽培から収穫、糸紡ぎ、作品制作までを体験しながら、衣服ができる過程を学んでいます。右下の作品は、収穫した綿から紡いだ糸で制作した、本学の徽章に描かれた「お茶の花」のブローチです。

Ochadai GAZETTE

vol.284
Autumn
2026

発行日 / 2026年11月4日
発行 / 国立大学法人お茶の水女子大学
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

ご意見・ご感想はこちらまで

広報・ダイバーシティ推進課

E-mail : info@cc.ocha.ac.jp
URL:https://www.ocha.ac.jp/

本誌、およびバックナンバーは、
本学ホームページに掲載されています。
どうぞご覧ください。

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

Copyright (C) 2026 Ochanomizu University. All Rights Reserved